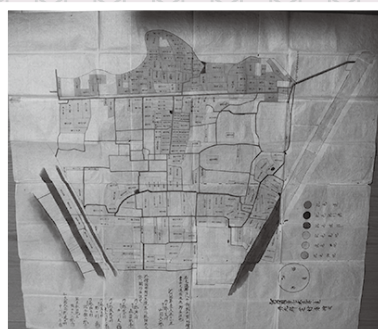
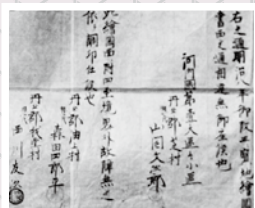
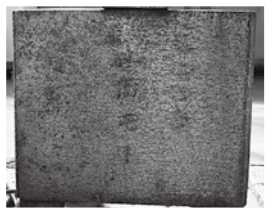
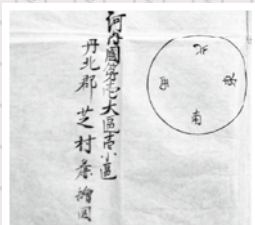


芝村と山岡家のあゆみ

西田 孝司 (松原市文化財保護審議会)



▲栄久寺本堂前の天水 (立部1丁目)
山岡文治郎 (上)と妻モト (下)の名が見える。

▲明治8年の芝村鹿絵図と山岡文次郎らの署名 (山岡家蔵)

▲山岡家住宅と貝殻跡の付いた舟板堀 (天美西2丁目)

山岡文次郎とあとを継いだ
立部村・藪野家出身の彦三

天美小学校正門前から阿麻美許曾神社方面に向かう道は、古道の下高野街道です。府道大堀堺線を越えて北に向かい、道沿いの民家から西に曲ると、芝地区の家並みに入る古くからの道が延びています。右手に芝公民館が見え、西接して真宗大谷派(東本願寺)の安楽寺が建っています(「歴史ウォーク」203)。現在の天美西二丁目にあたり

当時は、江戸時代前半ごろまでは丹北郡砂村とよばれていましたが、まもなく今の芝と隣りあう油上の二村に分かれたようです。のち、芝村は明治二十二年(一八八九)、油上村・城連寺村・池内村・堀村・我堂村と合併して丹北郡天美村となりました(明治三十一年に中河内郡へ)。

芝村は江戸時代半ば以降、油上村や我堂村と共に、狭山藩(大阪狭山市)・北条氏の領地でした。享和二年(二八〇三)六月、芝村が「狭山御役所」に提出した村方明細帳が残っています。それによると、当時の家数は四十二軒。人口は一八〇人で、そのうち男九十三人、女八十七人を数えました。氏神は阿麻美許曾神社で、「春日明神、牛頭天王、恵美須」を祀っています。

一方、寺は安楽寺が記されています。「東本願寺」とあり、我堂の真宗

大谷派の善正寺と深い関係を持ちながら、芝村の四十二軒全てが檀家でした。慈雲という看坊(住職)が一人、寺を守っていました。

安楽寺の門前に居をかまえているのが、江戸時代後半、芝村の庄屋をつとめていた山岡家でした。現在の山岡秀嘉さん宅です。明治十年(一八七七)から二十年(一八八七)ごろに建てられたといわれる母屋が今も残っています。今は瓦葺きですが、元は茅葺きでした。居室部分は整形四間取りで、その裏奥に座敷を設けています。外観入口の左右は舟板を組み合わせており、漁船の板を使ったのでしょうか。海に生息する貝殻が付着した白っぽい痕跡がいくつも見られます。荒波に漕ぎ出す強度を持った板壁なのです。また、牛をつないだと思われる駒つなぎの鉄輪も付けられています。

江戸時代末期、山岡家の当主は元平で、庄屋として芝村の民政を取り仕切っていました。「元物勘定帳」「差引勘定帳」「萬覺帳」など多くの古文書が残っています。元平は明治三十六年(二九〇三)、七十四歳で亡くなっていますので、文政十一年(二八二八)ごろの生まれとなります。明治時代に入ると、元平は当主の座を息子の文次郎に譲ったようです。文次郎は、昭和七年(一九三二)に亡くなります。死亡年齢はわかりませんが、山岡家に残る明治八年(二八七五)の芝村鹿絵図に芝村惣代として名前が記されています。惣代は総代とも書き、い

わば村長の立場にあたります。文次郎は成人に達していたと思われるので、幕末の嘉永(安政年間の一八五〇年代前後)の生まれだったと考えられます。芝村鹿絵図が描かれた明治八年、芝村は河内国第一大区一小区に所属していました。芝村の宅地や田畑、道路などが色分けされ、江戸時代後半ごろの家数四十二軒が安楽寺を中心に描かれています。

その文次郎が寺に寄進した本堂からの雨水をうける天水が存在することがわかりました。文次郎には子供がいませんでしたので、立部村の藪野家(現立部一丁目)から又次郎の次男・彦三を養子に迎え、家を継がせました。彦三は明治七年(一八七四)の生まれで、昭和十七年(一九四二)に六十九歳で亡くなりましたが、二十一歳になった明治二十八年(二八九五)、山岡家に入ったのです。藪野家は立部村の庄屋の家柄で、真宗大谷派の栄久寺(立部二丁目)、「歴史ウォーク」50)の北側に居宅を構えていました。

大正元年(一九一三)二月、文次郎は妻モトと共に、彦三の実家である藪野家の檀那寺である栄久寺本堂前に一对の天水を寄進しました。花崗岩製で、向かって右側に「施主天美村大字芝山岡文治郎大正元年二月現住職藪野義諦」、左側に「施主文治郎妻山岡モト」とあります。文次郎は、明治・大正・昭和の時代、山岡家を継ぎ、当主となった彦三の藪野家や栄久寺に深く機縁を持ったことが想像されるのです。